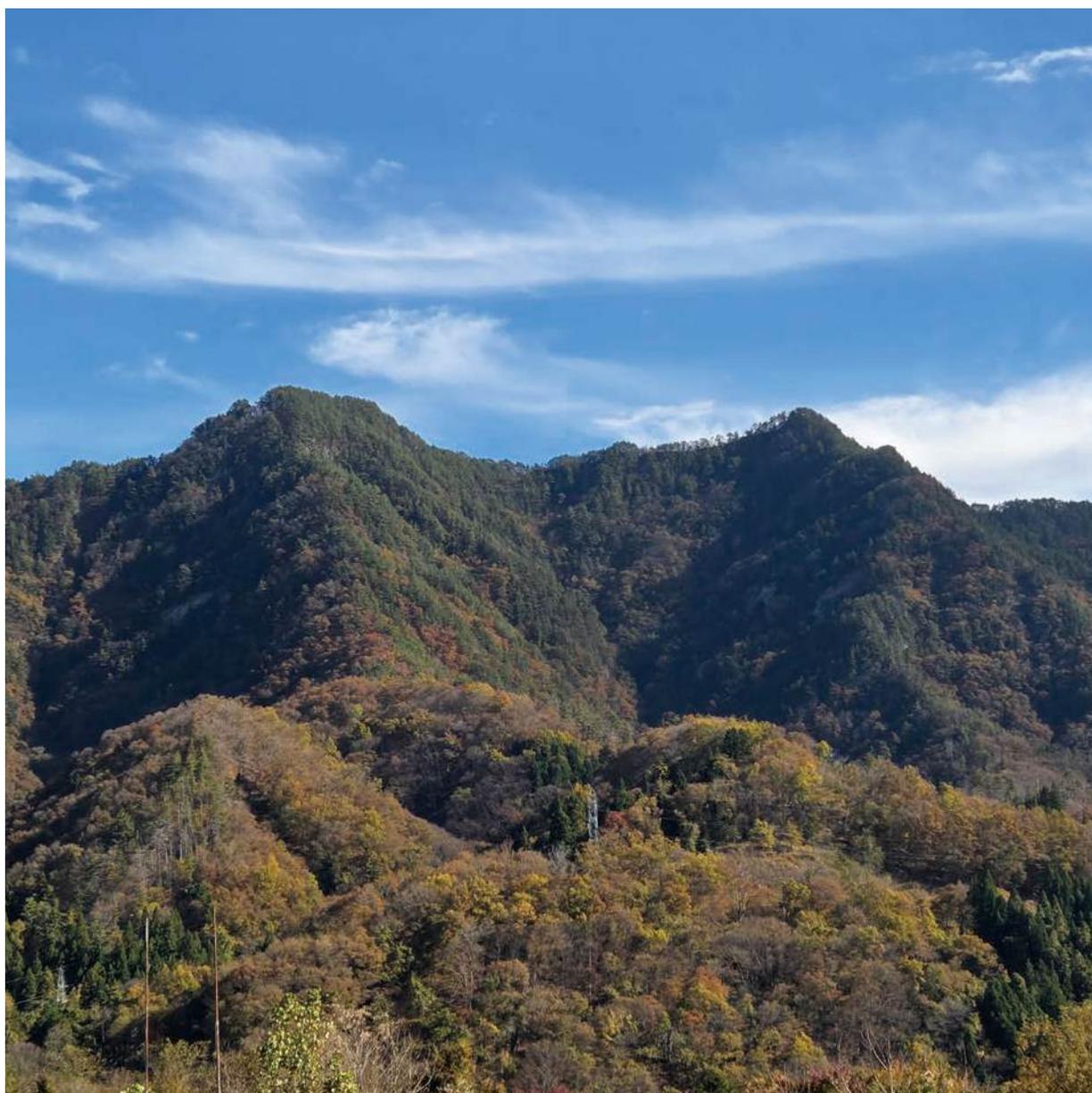


大城・京ヶ倉 登山ガイドブック

生坂村観光協会



もくじ

大城・京ヶ倉とは	2
大城・京ヶ倉ガイドマップ	4
大城・京ヶ倉を広く世に出す会	6
登山編	7
イワカガミ / 卒倒坂 / 万平 / 小屋城跡 / 大城・京ヶ倉登山口 / 日岐城址 / おおこば見晴台 / ヒカゲツツジ群生地 / 稜線分岐(万平下り口) / 馬の背 / 岩場 / 京ヶ倉 / 双子岩 / 大城(日岐大城址) / 安曇方面見晴らし台 / 物見岩・三角点 / 筑北方面展望台 / はぎの尾峠(ルート分岐) / あずまやと森林整備地(グレースの森記念林) / 眠り峠分岐点～眠り峠登り口	
歴史編	19
周辺施設のご案内	24

参考文献

- 『生坂村誌』(生坂村)
『生涯学習ガイドマップ』(生坂村)
『郷土の誇り 生坂のお宝見聞録』(生坂村教育委員会)
『目で見る郷土の誇り 生坂』(生坂村教育委員会)
『探訪 信州の古城―城跡と古戦場を歩く―』(郷土出版社)
丸山樂雲『信濃古武士』(信濃古武士刊行会)
『別冊歴史読本 謀将 山本勘助と武田軍団』(新人物往来社)
『武田信玄大事典』(新人物往来社)
中川治雄『図説国宝松本城』(一草舎)
宮坂武男『縄張図・断面図・鳥瞰図で見る 信濃の山城と館 第4巻 松本・塩尻・筑摩編』(戎光祥出版)
信濃史学会編『信州の山城』(信毎書籍出版センター)

表紙写真:高津屋森林公園付近から見る大城・京ヶ倉



発刊によせて

このたびは、生坂村が誇る里山、大城と京ヶ倉の魅力をより多くの皆さまにお伝えするため、登山ガイドブックをお届けできることを大変うれしく思っております。

私が村長に就任して以来、「大城・京ヶ倉を広く世に出す会」を立ち上げて、地域の皆さまと一緒に、本村の自然の豊かさを発信する取り組みを進めてまいりました。春と秋に実施しているトレッキングツアーには、多くの方にご参加いただき、毎回明るい笑顔と温かい感想を寄せていただいております。こうした声は、村民の励みであるとともに、この里山が持つ魅力の確かさをあらためて実感させてくれるものです。

大城・京ヶ倉は、里山ならではの親しみやすさを備えながら、適度な起伏や岩場もあり、歩くたびに景色の変化を楽しめるのが特徴です。山頂や尾根からは、北アルプスの壮大な稜線を望み、眼下には犀川が大きく蛇行しながら村を潤す様子が広がります。晴れた日の眺望は格別で、生坂村の「山紫水明」を感じられる風景が皆さまを迎えてくれます。

また、四季折々の自然の彩りも、この登山の大きな魅力です。春には可憐なヒカゲツツジが淡い黄色の花を咲かせ、秋には山全体が紅葉に染まり、訪れる人の心を和ませてくれます。こうした季節の移ろいを身近に感じられることは、生坂村の大きな財産であり、これからも大切に守り育てていきたいと考えております。

本ガイドブックが、大城・京ヶ倉を初めて訪れる方にも、繰り返し足を運んでくださる方にも、安心して登山を楽しんでいただくための一助となれば幸いです。そして、この里山で過ごす時間が、皆さまにとって心豊かなひとときとなることを願っております。

皆さまのお越しを、村民一同、心よりお待ちしております。

令和8(2026)年2月

生坂村観光協会 会長
生坂村長 藤澤 泰彦

大城・京ヶ倉とは

安曇野市明科から長野市に向かって国道19号線を走り、生坂村に近づくと、右手にラクダのコブのような形をした岩山が見えてきます。これが「大城・京ヶ倉」です。生坂村の村誌で紹介された「刃こぼれした巨大なノコギリのような奇妙な山容」が目を引きますが、京ヶ倉は標高990m、大城が同980mと決して高くはありません。しかし、岩山で険しいうねに国道に沿ってそびえ立つ姿を間近に望むせいか、想像以上に高く雄大に見えます。その「奇妙な山容」も興味をそそり、一度は登ってみたいくなる山です。

この山は、山麓ふもとに点在する生坂村の集落と、犀川の対岸の山間に点在する池田町の集落を、まるで自分の懐の中に抱え込んでいつくしむように見下ろしています。登山道の山頂や松林の間からは、西側の眼下に生坂村・池田町の集落、遠方に目を向ければ美しい常念岳じょうねんだけ、蝶ヶ岳ちやがたけ、有明山あつみだいらと安曇平が望めます。また、北方には蓮華岳れんげだけ、爺ヶ岳じいがたけ、鹿島槍ヶ



岳の北アルプスの連山、東側には雄大な聖山ひじりやま ちくほくと筑北の村々、さらに好天に恵まれば煙を噴き上げる浅間山まで遠望できます。

山のいわれも歴史が深く、戦国時代に生坂谷を治めていた丸山氏(仁科一族)が山上に城を築き、甲斐・武田信玄との戦いの備えとしたといいます。武田滅亡後には、府中(松本)の小笠原氏に攻められた古戦場でもあり、京ヶ倉～大城～眠り峠の登山道は小笠原氏がおみ麻績城攻めに使用した重要な戦略道路でもありました。

登山道は通常の里山登山と違い、ところどころ険しい箇所がありますが、そのぶん冒険感覚で飽きることなく、達成感もひとしおです。いくつもの古戦場となった史跡を探り、往時をしのびながら登る楽しみと、登るたびに四季折々の花や異なる景色が発見できて、探検気分を味わえる山です。



蝶ヶ岳 常念岳 横通岳 大天井岳 燕岳 餓鬼岳
有明山

京ヶ倉から望む北アルプス連峰



時間と距離の目安

万平(まんだいら)から登り下生坂に下山する道順のほうが、道しるべやテープで進行方向が示されているため道に迷いません。最長コースで約5時間が目安です。

04万平登山口～06おおこば見晴台	45分	1.1km
06おおこば見晴台～08稜線分岐点	20分	0.4km
08稜線分岐点～11京ヶ倉山頂	35分	0.6km
11京ヶ倉山頂～13大城山頂	20分	0.5km
13大城山頂～15物見岩	20分	0.6km
15物見岩～18はぎの尾峠分岐点	10分	0.2km
18はぎの尾峠分岐点～20眠り峠分岐点	30分	1.1km
20眠り峠分岐点～眠り峠	10分	0.2km

大城・京ヶ倉 ガイドマップ



京ヶ倉から望む東の山々

剣刷山 ▲

カーナビゲーション用マップコード

① P1 158 653 067*63

② P2 158 713 117*61



発足からまもなく25年—— 大城・京ヶ倉を広く世に出す会

大城・京ヶ倉は多彩な魅力をもちながらも、整備のための人手不足に伴い、かつては登山道の手入れが十分に行き届いておらず、登山客がほとんど訪れることがありませんでした。

この状況に危機感を持った地域住民が声を上げ、立ち上がったのが「大城・京ヶ倉を広く世に出す会」です。村と住民が協働して登山道整備等を行い、平成18(2006)年度に年間100人程度であった登山者は、いまでは年間2,000人を超えます。

村外からの登山客だけでなく、村民も登山を楽しむようになり、村の象徴として誇りと愛着が育まれています。

●会の概要

平成13(2001)年発足 初代会長:吉澤弘迪 当初会員数:30名
令和7(2025)年4月現在 会長:平田勝章 会員数:10名

●主な活動内容

- ・トレッキングツアーガイド(年2回、春と秋)
- ・長野県「地域発元気づくり支援金」優秀事業表彰(平成18年度)
- ・眠り峠付近の山林整備(グレースの森)と、村就労センターへ伐採木をシイタケ原木として提供(平成19年度)
- ・登山者送迎(5月大型連休、平成25~30年の5年間)
- ・大城・京ヶ倉カレンダー作成(平成20年)
- ・フォト川柳の開催(平成20年度)
- ・京ヶ倉山頂の記念碑建立(平成23年度)



トレッキングツアー風景



京ヶ倉山頂の記念碑建立



登山編



大城・京ヶ倉登山は、花が見ごろを迎える春や、紅葉する秋が人気のシーズンです。登山道は幅が狭く、上り下りともに険しい箇所もあるので、初心者向け——とは言いがたいルートですが、眼下の人里や遠く山々を見渡す景色がすばらしく、リフレッシュさせてくれます。また、岩場をよじ登ったり、両側絶壁の“馬の背”を渡ったり、かと思えば、ふかふかと心地良い平坦な松林の道をのんびり歩いたり、変化に富んで楽しみが尽きないルートでもあります。主な見どころを紹介します。



MAP

21

イワカガミ



山地に自生するイワウメ科の常緑多年草。横にはこの地下茎があり、葉はその先端に数個集まります。葉は円形または卵円形で厚く、上面にツヤがあり長い柄があります。花は淡い紅色、つりがね状で内部の下方に白い毛があり、花弁の先端は細かく裂けているのが特徴です。

この山では、はぎの尾峠～眠り峠間の道筋に見られ、花の見頃は5月頃。



MAP
01

そつとうざか
卒倒坂

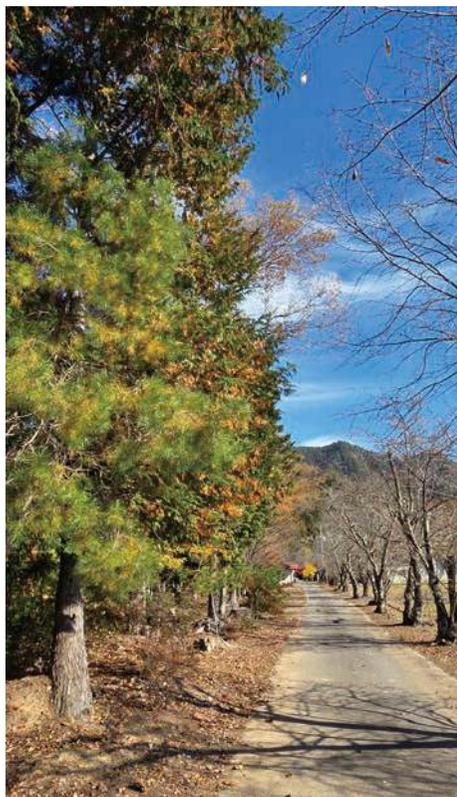


㊤ひばり桜 ㊦九人句碑

いわや さざなみ
巖谷小波(作家・俳人、1870-1933)が命名したといわれる、ひばり桜(村指定文化財)がたたずみます。桜の幹周は約3.4m。

この場所には、村出身の俳人・平林鳳二(1870-1927)の句碑があります。昭和2(1927)年4月、鳳二が桑園を寄附して公園を造り、その御礼にと青年団が「あの山が 高いか ひばり雲雀 たかゝるか」の句碑を建立しました。傍らの九人句碑には、同じく村出身の法学者・加藤正治(犀水、1871-1952)の句「わがさと吾里や 飾り兜を 姿にて」も刻まれています。

MAP
02 まんだいら
万平



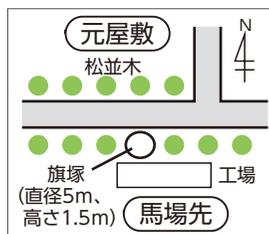
松並木

上生坂小屋城の下、2ha余りの平地。元屋敷にはその昔に丸山氏の居館があり、天正10（1582）年に小笠原氏に攻略されたと伝わります。中央部の馬場先には、松並木が続いていました。元禄4（1691）年に250本植えられましたが、現在は1本が残るのみ。松並木を再現しようと、地元の人々により松の植樹も行われています。また、並木の南側に10基ほどあったという旗塚も、現在1基が残っています。

馬場先の東側には注進口の地名が残っています。西下の狐原は監視兵がいたといわれる地です。



旗塚



MAP
03 こや
小屋城跡



犀川右岸の山上、万平の居館跡の山頂に位置しており、犀川を隔てて間近に日岐城址を、また北に日岐大城も望めます。

当初の城主は日岐丹波守盛武（日岐城主）^{たんばのかみ}でしたが、武田氏配下では平林刑部信盛^{ざようぶ}（高遠城で討死）となりました。

万平から登山口に向かう道沿いに平林信盛の墓があり、この墓地は平林（一星）家、加藤正治（犀水）の生家の墓地でもあります。

MAP

04 大城・京ヶ倉登山口



登山口は万平の東口、小屋城の下の^{しんぜ}新生山への林道を500m進んだ地点にあります。手前にある作業用建物は目印にもなります。登山口には乗用車が5台ほど駐車できる平地があり、大城・京ヶ倉登頂後、下生坂へ下山せずに往復する場合に便利です。

登山道は幅が狭く、歩き始めから比較的急な上りになっていきます。途中、はしご場もあるので注意して進みます。

Check!

登山口へは車で進めますが、道幅が狭く注意が必要です。途中のゲートは手で開閉します。なお、ゲートを開けたら必ず閉じましょう。登山口には登山ノートやMAPが置かれているほか、トイレも利用できます。トイレはここと、眠り峠手前のあずまや脇に簡易トイレがあるので、まずは準備を整えましょう。



MAP 05 日岐城址

日岐城は、犀川が生坂谷に入って最も屈曲したところの尾根先に築城されました。西方は尾根続きに次第に高くなり、^{はくじつ}白日地区を経て池田町に通じます。ほか三方は犀川に囲まれた自然の要害地です。標高は630m。

城は大町・仁科家より丸山家に婿入りした盛慶にはじまり、盛高・盛次・盛武など丸山（日岐）一族が約100年間在城しましたが、天正10（1582）年に小笠原貞慶に攻略されました。

日岐殿屋敷は裏日岐の平地、犀川の最も屈曲した先端に立っていました（屋敷跡が残る）。屋敷の背後には氏寺の正福寺跡があり、尾根道を登れば数百mで日岐城に達します。正福寺跡には丸山（日岐）一族の印塔、五輪塔7基が立っています。

MAP 06 おおこば見晴台



日岐城址を正面に臨む見晴台からの眺め

稜線分岐までの登り道のおよそ半分地点。ルートの中でも指折りの絶景ポイントで、眼下には生坂ダム、水鳥公園、裏日岐（日岐氏館跡）、日岐城址が見渡せます。天正10（1582）年の小笠原貞慶による日岐城攻めの際、日岐城はこの犀川の急峻な要害のおかげで落城までに1か月を要しました。ここからの眺めは、そうした背景をうかがい知ることができます。

MAP
07

ヒカゲツツジ群生地



おおこば見晴台から稜線の分岐点までを中心に、ヒカゲツツジの群生が見られます。常緑の低木で山地の崖や岩の上などに自生しており、やや日当たりの悪い場所に生えることがその名の由来となっています。本州の中部から四国、九州に分布。高さ1~2m、枝は分枝し無毛であり、葉は先の細い形で薄く、互い違いに生えるため輪生状に見えるのが特徴です。花は枝先につき、淡い黄色。見頃は4~5月頃です。

MAP
08

稜線分岐(万平下り口)



稜線に出るところに、左手の京ヶ倉方面への案内看板があります。逆に、京ヶ倉山頂からは折り返して下山していく登山者も多いため、分岐となるこの場所に「万平下り口」の案内も掲げられています。

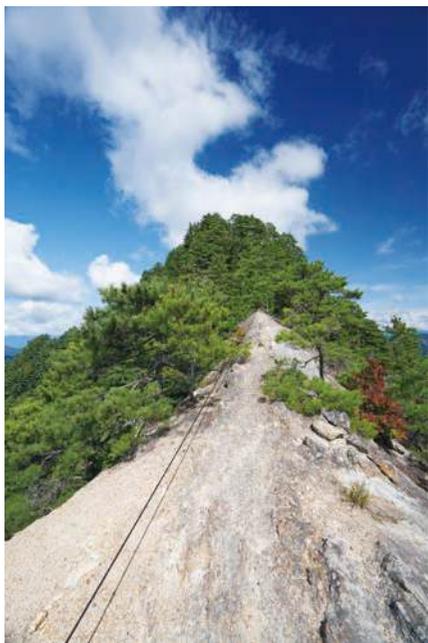


Check!

登山ルートには、ところどころ迷いやすい箇所があります。目印のテープ(写真)や案内板を確認しながら進みましょう。



MAP 09 馬の背



京ヶ倉方面への稜線分岐点から約500m進んだ地点にあり、登山道の第一番目の難関。道幅は約50cm、両側を崖に挟まれたようすから「馬の背」と呼ばれています。20mほどの道沿いにはロープを張り安全を確保していますが、岩の凹凸もあり気は抜けません。前方に見える、お寺の鐘のような形をした京ヶ倉を慎重に目指します。



Check!

馬の背を渡らず、巻き道で迂回もできます。強風時など天気によっても危険が増しますので、無理せず進みましょう。



MAP 10 岩場



京ヶ倉手前の約20mの岩場で、馬の背に次ぐ難関です。登山者の中には「ジャンダルム」(西穂高岳～奥穂高岳の岩壁)と例える人もあり、ところどころにある岩の亀裂を足場にして登ることができ、登攀には注意を要します。

岩壁に張られたロープが、安全確保と登攀のサポートになります。

眼下に犀川ダム湖と国道19号、生坂村の集落を見渡すことができます。

MAP
11

京ヶ倉 (990m)



㊦山頂からの眺め ㊧山頂風景



句碑

「京ヶ倉(きょうがくら)」の山名の由来は、文献に明確な語源説明がほとんどありませんが、郷土資料レベルで語られている一つに、修験道の修行の場であった可能性があり、「京」は「お経(きょう)」を意味し「倉」は岩山・崖地形を表す地名要素とする説があります。

山頂は約12×6mの平地で、大城の物見台であったと伝わります。北方には蓮華岳、爺ヶ岳、鹿島槍の北アルプス連山を望み、絶好の休憩ポイント。傍らには、村出身の加藤正治博士(俳

号は犀水)の「吾里や 飾り兜を 姿にて」が刻まれた句碑があります。村一番高い山に据え、村一番の偉人の業績を村民が未来永劫忘れないことを確認する意味で、平成20(2008)年10月、長野県「地域発 元気づくり支援金」を活用し、大城・京ヶ倉を広く世に出す会により建立しました。

Check!

京ヶ倉からは、大城・眠り峠方面へ縦走するか、単独登山で車の移送手段がない場合などには、ふたたび万平の登山口へと折り返して下山する人も多く見られます。大城へと進む場合、京ヶ倉山頂から急な下りとなるので歩みは慎重に。

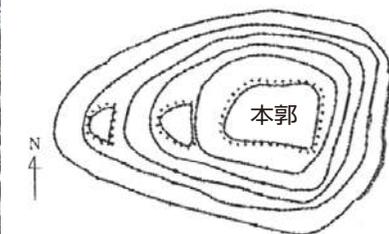


MAP
12 双子岩



京ヶ倉から大城までの間にも、馬の背に似た高度感ある狭い稜線が出現するので注意して進みます。また、ところどころに迫力のある大岩が見られ、「双子岩」は見どころの一つ。看板があり、登山ルートが目印にもなります。

MAP
13 大城(日岐大城址) (980m)



大城の縄張り図
(城郭の基本設計を描いた平面図)

山頂風景

日岐大城は、中世に生坂一帯を領した丸山氏が築いた城です。犀川右岸の生坂山脈上にあり、その規模と堅固なことは「仁科氏第一の要害城」と称されました。犀川べりには国道19号が通り、東側は入山谷を隔てて、筑北村の岩殿山脈がそそり立っています。

本郭は15×13mの平地であり、北側の下に曲輪(城郭内を区切って作られた平らな場所)で、防御のため段々状に配置された。「郭」とも)が3カ所あったと伝わります。

大城の直下、下生坂の樋ノ口沢と山諸沢に挟まれた山稜には、源三屋敷、孫三屋敷がありました。丸山氏が戦時の居館としたと考えられています。

MAP
14

安曇方面見晴らし台

見晴らし台からの眺め



大城から、樹木の中の急な下り道になるため、ロープを頼りに滑らないよう慎重に下ります。その先の道は、松林の中の平坦な道となります。

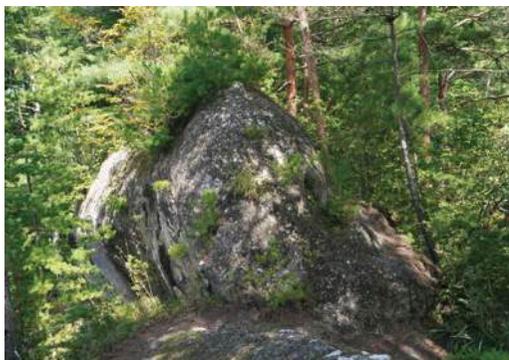
途中、松林の間から、犀川に沿った生坂村の各集落と、山腹の巨峰園、高津屋森林公園や、昭和12(1937)年に建設された昭和電工(当時)広津発電所が見られます。発電所の水は大町市の青木湖から11km引かれ、高津屋山頂から落として発電しています。落差は202m。

左手には池田町の奇勝「ままこ落とし」、その遠方には安曇平、中央には池田町の大カエデが小さいながら遠望できます。

MAP
15

MAP
16

物見岩・三角点



見晴らし台からまもなく、戦国時代に番兵が見張りをした場所と伝わる物見岩が見えてきます。さらに進むと三角点へ。明治30年代、国の陸地測量部(現国土地理院の前身)が眺望の良いところに三角形のやぐらを立てて測量を行い、5万分の1の地図を作成した重要な基準点です。

物見岩

MAP
17

筑北方面展望台



この地点から東に目を移すと、筑北村の山々(岩殿山^{かむりきやま}や冠着山^{あづま}、大沢山、四阿屋山^{やさん}と、麻績村の聖山(1447m)を望めます。秋から冬にかけて天候が良い日には、これらの山越しに遠方の浅間山の煙を見ることが出来ます。

山々の展望

MAP
18

はぎの尾峠(ルート分岐)



はぎの尾峠の分岐点と案内

三角点から先は平たんで静かな松林の道が続き、樹間には、春にはミツバツツジ、ヤマツツジ、レンゲツツジが見られます。やがて、はぎの尾峠へ。ここは大城から北へ、眠り峠に至る道と、下生坂へ下る道との分岐点。「左眠り峠方向、右大城・京ヶ倉」「下生坂方面」の二つの道標と、下生坂区の案内図があります。この先は、それぞれ特徴が異なる3つのルートに分かれます。

はぎの尾峠を通る道は、江戸時代以前より昭和40年代まで、下生坂から大城、入山方面へ向かう重要な生活道路でした。

Check!

- (1)はぎの尾峠→下生坂 急な下り(約30分)
- (2)はぎの尾峠→眠り峠分岐点→林道→下生坂 なだらかな下り(約40分)
- (3)はぎの尾峠→眠り峠分岐点→眠り峠(林道終点)→林道→下生坂

距離は長いが林道からの眺望が良い(約60分)

3ルートのうち(1)は所要時間が最も短いですが、急な下りで注意が必要です。大城への至近距離にあるので、下生坂から登る人に利用されています。

MAP
19

あずまやと森林整備地(グレースの森記念林)



㊦グレースの森
㊦・㊦あずまやには簡易トイレもあり休憩できる



この地点の森林整備地は、大城・京ヶ倉を広く世に出す会が県の支援金を得て、約半年をかけて整備を実施した山林です(平成20年)。「グレースの森記念林」と名づけられました。手前に立つあずまやも、同会が、村の中心部・上生坂より登山道を利用して資材を搬入して建設しました。

MAP
20

眠り峠分岐点～眠り峠登り口



ここで二手に道が分かれ、大城方面から見て右手に上るルートは、眠り峠を経て林道雲根線終点から下生坂の里へと下るロングコース。途中、山の斜面にイワカガミの群生地があります。一方の左手は、比較的緩やかな山間を抜けて林道入り口付近へと下山するコースです。

林道を下っていくと、10台ほどの駐車スペースとゲートが見えてきます。その先には目印にもなるお堂。そして下生坂の里に至ります。



㊦分岐点 ㊦山中から、林道・雲根線へ(登山口)



歴史編



京ヶ倉から大城へと向かう

生坂村には戦国時代の山城跡や館跡が非常に多く、それに関係した地名が140か所もあります。村歌(生坂村讃歌)にも「日岐大城や 古戦場 古人の風の跡」と歌われています。大城・京ヶ倉登山道はまさに「古人の風の跡」をたどる道であり、その歴史・史跡に触れて、誰しも往時に思いをはせることでしょう。

村誌発刊以来30年以上が経過し、当時の村誌編集に関わった方々も鬼籍に入られたり高齢に達したりし、戦国時代の生坂について正確に語るができる人は少なくなってきました。村内の山城跡や館跡を保存し、後世にその存在を知らしめることは、今後の村づくりに不可欠なことと考えます。

どうか、大城・京ヶ倉に登山する方々には、生坂村の厳しい環境の自然と戦国時代の歴史について学び、その知識を登山の記念と心の土産として持ち帰っていただきたいと思います。

令和8(2026)年2月

大城・京ヶ倉を広く世に出す会
ひろみち
吉澤 弘迪

生坂の戦国



——日岐城・日岐大城をめぐる攻防

大城・京ヶ倉登山は、生坂の歴史にふれる絶好の機会でもあります。

眼下には、うねるように流れる犀川に囲まれた日岐城址。

険しい山上には、日岐大城や見張り台であったという物見岩など

戦国時代の攻防をしのばせる見どころがあちこちに残ります。

信玄の筑摩・安曇郡侵攻、丸山（日岐）氏の100年にわたる在城……など

知れば登山がより深まる、主な歴史トピックを紹介します。

①戦国時代以前 明応年間(1492~1500)

日岐城・大城と丸山氏

戦国時代、生坂の地を領有していたのは、丸山氏（日岐氏）の一族でした。さかのぼると、明応年間に、大町の仁科明盛の子・盛慶が丸山氏に婿に入ります。これを機に、主家である仁科氏は犀川地域に進出、盛慶は日岐城や日岐大城を築き、その子・盛直（大城城主）と政友（日岐城代）らはこの地を拠点に周辺広域をも領有するようになります。

群雄割拠の戦国時代、それまで平地や山麓に居館を構えていた武将たちは、守りを固めるために山上に城を築くようになりますが、生坂にも数々の城館跡が残っています(23ページ参照)。日岐城や日岐大城はその代表格で、丸山氏（日岐氏）一族代々が長きにわたって在城しました。

◎日岐大城城主・日岐城主

丸山肥後守盛慶
(日岐大城主)
仁科氏より婿入り

仁科道外盛明
(日岐大城主、日岐城代)
小笠原長時義父・盛康の代理を務める

筑前守政友
(日岐城主)
討死

日岐盛教(盛次)
(日岐城主)
武田信玄へ起請文連署

盛直
(日岐大城主)

肥後守盛直
(日岐大城主)
丸山氏嫡流

丹後守盛真
(日岐大城主)

盛武
(日岐城主)
小笠原貞慶より攻撃される

②天文14年(1545)～

武田晴信(信玄)の筑摩・安曇侵攻

武田信玄が信濃の領有化を狙って高遠城に攻め入ったのは、天文14(1545)年のこと。しかし信濃の攻略は、当時の信濃国人・小領主の抵抗勢力によって、簡単には実現しませんでした。進攻は繰り返し行われ、これに越後・上杉謙信の北信濃進出が加わり、信濃の戦国時代は武田氏滅亡の天正10(1582)年まで、40年間に及ぶことになります。

信玄の筑摩、安曇両郡への進攻は天文17(1548)年、塩尻峠の戦いに始まります。武田軍と小笠原長時軍がこの地で激しい戦いをしますが、このとき小笠原長時軍にあった日岐大城主・仁科道外(盛明)が武田方へ走り、小笠原軍は大敗。松本盆地に武田勢力が進入し、筑摩・安曇両郡地域が戦国乱世に巻き込まれていきました。

この戦いで、病身であった仁科の当主・盛康に代わり、仁科の総大将として軍事をつかさどった道外(盛明)は、長時との間で参陣の条件交渉が決裂し、兵を引き揚げた、とも。実は、道外は信玄によって本領安堵されていたのだといいます。そのため、以降の武田勢による筑摩・安曇への進攻で小笠原配下の城は被害が大きかったのに比べ、仁科氏系統の日岐城、日岐大城は安全であったといわれています。

■戦国時代年表

年	できごと
明応年間 (1492～1500)	生坂の地は丸山氏が領有……① 仁科明盛の子・盛慶が丸山氏に婿入り、丸山肥後守と称す。犀川地域まで仁科氏の勢力が進出
武田晴信(信玄)の筑摩・安曇郡への侵攻(1545～1569) ……②	
天文14(1545)	武田晴信(信玄)、筑摩・安曇侵攻開始 高遠・箕輪城攻めで小笠原長時を追って塩尻に入る
天文17(1548)	塩尻峠の戦いで小笠原軍に大勝 仁科道外(盛明)が謀反し、武田方へ
天文18(1549)	村井城落城、村井城を前線基地とする
天文19(1550)	丸山政友(盛慶の子、日岐城主)討死 小笠原長時配下の深志、伊深、桐原など落城 信玄、深志城を修築
天文20(1551)	安曇郡に侵攻し平瀬城を落とす
天文21(1552)	小岩(ヶ)岳城を攻め落城させる
天文22(1553)	会田(刈谷原)・筑北(青柳・麻績)を攻略し、筑摩・安曇両郡を手中におさめる。小笠原長時、越後に逃れ保護を求める 川中島合戦(1回目) 以降、永禄7(1564)年にかけて5回
永禄10(1567)	仁科家総領仁科盛政、日岐盛次ら仁科親類衆が生島足島神社に信玄に異心なき事の起請文を出す……③
永禄10～12 (1569)ごろ	仁科盛政は上杉氏に内通した疑いで信玄に切腹させられ、仁科家断絶。仁科家は信玄の五男が継ぎ、仁科五郎盛信と称す

③永禄10(1567)年

武田氏へ服属誓う「血判起請文」

信玄は永禄9～10(1566～1567)年、神前に武田氏への服属を誓う血判起請文(上田市生島足島神社蔵、国重文)を配下の武将に差し出させています。

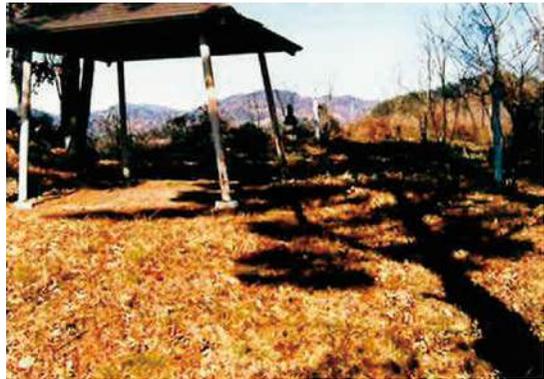
その中には、仁科惣家の仁科盛政や、大城城主の日岐盛次ら仁科家の親類衆のものも見つかっており、上杉勢と対する信玄が生坂の地を重要視していたことが見て取れます。

④天正10(1582)年

小笠原貞慶の日岐城攻め

織田軍との戦いのなかで勝頼が戦死し、武田氏が滅亡。安曇・筑摩の両郡は長きにわたる武田氏支配から解放されて織田信長の支配下に入り、信長亡き後、日岐氏は領地拡大を狙う上杉景勝の配下となりました。

天正10年、その日岐氏が守る日岐城をめぐる戦いが勃発します。仕掛けたのは、徳川方の小笠原貞慶でした。貞慶は、上杉氏ゆかりの小笠原貞種を深志城から越後に追い、深志城を松本城と名を改めて城主となったばかりで、周辺の筑摩・安曇郡を掌握するに



日岐城址

年	できごと
天正元(1573)	武田信玄病死勝頼、武田家を継ぐ
天正3(1575)	武田勝頼、織田信長・徳川家康連合軍に長篠で大敗
天正4(1576)	武田勝頼により日岐大城没収される 替地を松本市笹賀へ
天正6(1578)	上杉謙信(長尾景虎)病没景勝が上杉家を継ぐ
天正10(1582)	織田信長、武田討伐のため甲斐・信濃へ侵攻 3月 勝頼、天目山で自害 40年間の武田の信濃支配が終わる 6月 織田信長、本能寺で自害 小笠原貞種、深志城へ入る 7月 小笠原貞慶、深志城へ入る(松本城と名を改める) 8月 小笠原貞慶の日岐城攻め……④ 9月 日岐城落城、盛武は降参し、盛慶以後約100年間にわたる丸山氏の在城が終わる
天正12(1584)	小笠原貞慶の麻績城攻め 日岐盛武、宇留賀氏が眠り峠に在陣する

は、上杉氏の影響が強い日岐氏の存在が邪魔であったのです。

当時の日岐城主は日岐盛武、日岐大城主はその兄・盛直でした。8月上旬、貞慶は日岐城攻めを開始します。日岐氏の小笠原氏に対する不信が根強い抵抗となって小笠原軍の平出からの攻略、登波離橋^{とほりばし}を守備していた日岐勢への攻略では両軍は多数の戦死者を出したうえに、戦場は攻め難く守りやすい“天然の要塞”とあって、攻撃開始から実に1か月にわたる長期戦となりました。9月上旬、ついに落城。ここに、盛慶以後、約100年間にわたる丸山氏(日岐氏)一族の日岐城在城が終わりを告げました。

城主であった盛武は落城後、小笠原貞慶の臣下となって日岐六郷(上生野・小立野・下生野・上生坂・下生坂・日岐)や周辺の地を安堵されます。そして以降は小笠原家のために働いたといえます。一方、兄・盛直は、攻撃を受けた形跡がみられず、それは上杉方の更級郡稻荷山城主となっていて日岐大城を去っていたからという説や、上杉氏が支配していた川中島方面へ逃げていたからという説があります。



(参考) ■生坂村の城館跡

- | | |
|------------------------|----------------------|
| (1)中がいと居館(小立野) | (16)丸山殿屋敷・矢殿(下生坂丸山) |
| (2)中野山城(小立野) | (17)日岐城(日岐) |
| (3)小池城(小立野入) | (18)日岐殿屋敷(裏日岐) |
| (4)高松薬師城(横谷城)(小立野) | (19)佃・南の番所屋敷(日岐、表日岐) |
| (5)川ばさま物見(明賀上と小立野の境) | (20)北の番所屋敷(日岐、表日岐) |
| (6)猿が城(下生野池沢と明科町矢下沢の境) | (21)中山城(長谷久保) |
| (7)中海道(下生野) | (22)高津屋城(東広津、昭津) |
| (8)殿村(上生坂中学校南側) | (23)内城(東広津、大日向南平) |
| (9)万平(上生坂万平) | (24)城坂屋敷(東広津、大日向北平) |
| (10)小屋城(上生坂万平こや) | (25)高見の居館(東広津、大日向北平) |
| (11)日岐大城(下生坂大城) | (26)彦左衛門屋敷(大日向北平) |
| (12)源三屋敷・孫三屋敷(下生坂) | (27)城平(東広津、大日向の北端) |
| (13)城が原・こやしき(下生坂雲根) | (28)宇留賀城(東広津、宇留賀) |
| (14)猿が城(下生坂雲根) | (29)金戸山城(東広津、宇留賀) |
| (15)大タテ(下生坂込地) | |



周辺施設のご案内

道の駅 いくさかの郷



直売所では、生坂村で採れた旬の農産物を販売しています。春は山菜や淡竹(タケノコ)、夏は夏野菜、秋は特産品のブドウが並びます。
定休日:月曜日(祝日の場合は翌日休)、
年未年始

営業時間:9:00~17:00
TEL:(0263)69-1930



お食事 かあさん家^ち



道の駅いくさかの郷に併設する食事処。地元のお母さんたちが地粉を使って丹精込めて打つうどんは、人気メニューです。

定休日:月曜日(祝日の場合は翌日休)、
年未年始

食堂:11:00~14:00
おやき販売:10:00~
なくなり次第終了
TEL:(0263)69-2712



宿泊・入浴 やまなみ荘



天然ラジウム鉱泉の大浴場が自慢の宿泊施設で、日帰り入浴や休憩、お食事のみの利用も可能。宿泊者には京ヶ倉登山口までの送迎サービスもあります。

入浴時間:11:00~21:00
食堂/昼部:11:30~13:30ラストオーダー
夜部(夏):17:30~20:00ラストオーダー
夜部(冬):17:00~19:30ラストオーダー
TEL:(0263)69-2032



コテージ&キャンプ場 高津屋森林公園



国道19号線から15分とアクセスが良く、雄大な北アルプスを望むロケーションが魅力。アウトドアレジャーが楽しめるほか、コテージやキャンプエリアで滞在もできます。

利用時間:コテージ泊14:00~翌10:00
キャンプ泊14:00~翌12:00
(冬季12月~3月は閉鎖)
TEL:(0263)69-3900





安全な登山のために

— 大城・京ヶ倉登山の注意点と心得 —

山の特性

- ・ 標高は約1,000m前後と低山に分類されるが、登山道の難易度は決して低くない。
- ・ 岩稜帯が多く、土の登山道とは異なり足場が不安定で滑落リスクが高い。
- ・ 「馬の背」と呼ばれる区間は、道幅が非常に狭く、両側が切れ落ちている。

登山技術・体力面

- ・ 初心者の単独登山は推奨されない。経験者と同行するか事前に岩場登山経験を積むこと。
- ・ 三点支持(両足+片手、または両手+片足)を常に意識し、無理な体勢で進まない。
- ・ 下山時の方が転倒・滑落事故が多いため、下りこそ慎重に行動する。

装備・服装

- ・ 滑りにくい登山靴(トレッキングシューズ以上)を必須とし、運動靴での登山は避ける。
- ・ 両手を自由に使えるよう、ザック使用を前提とする。
- ・ 岩場での転倒に備え、手袋(滑り止め付き)の着用を推奨。
- ・ 天候急変に備え、防寒着・雨具を必ず携行する。



天候・時期

- ・ 雨天時・雨後は岩肌が非常に滑りやすく、登山不適となる。
- ・ 霧やガスが出ると視界が悪化し、馬の背では特に危険が増す。
- ・ 冬季、積雪期、凍結時は一般登山者向けではなく、原則入山を控えるべき。

クマ出没リスクへの対応

- ・ 近年、周辺地域でクマの目撃・出没事例が報告されている。
- ・ 単独行動を避け、複数人で行動することが望ましい。
- ・ クマ鈴やラジオなど、音の出るものを携行し、存在を知らせながら歩く。
- ・ 早朝・夕方はクマの活動時間帯と重なるため、登山時間帯は日中に限定する。
- ・ 万一遭遇した場合は、あわてず距離を保ち、背を向けて走らない。また、大声などを出さず目線を合わせないようにして、ゆっくり後退する。
- ・ クマを誘引しないため、行動食や弁当の臭いに注意し、生ゴミ・食べ残し・包装類は必ずすべて持ち帰る。休憩時もザックから食べ物を出しっぱなしにしない。



行動計画・安全管理

- ・ 登山前に必ず登山計画を立て、家族等に行程を共有する。
- ・ 無理なスケジュールを組まず、時間・体力に余裕を持った行動を心がける。
- ・ 体調不良や恐怖感を強く感じた場合は、途中でも引き返す判断を最優先とする。
- ・ 携帯電話は圏外となる場合があり、緊急連絡手段が限定的であることを理解しておく。



大城・京ヶ倉 登山ガイドブック

令和8(2026)年2月27日

発行 生坂村観光協会
東筑摩郡生坂村5493-2生坂村役場
TEL.0263-69-3112

編集 大城・京ヶ倉を広く世に出す会